

観察力を活かし生命科学系の論文で受賞
農民ノーベル賞めざすプロジェクト

スタインベックは『怒りの葡萄』でノーベル文学賞を受賞した(1962年)。パールバックは『大地』で同賞を受賞した(1938年)。しかし、彼らは作家として農民を描いてノーベル賞を受賞したのであって、農民ではない。農民がノーベル賞を受賞した例はないのではないかと(もしかすると寡聞浅学か)。

私は「農民がノーベル賞を受賞する」時が来ると思う。作家(文学者)にできて、なぜ農民自身ができないのか。理由はないと思う。差別、蔑視は無用。日本の農民が、将来、自然科学系のノーベル賞を受賞する時が来るであろう(文学賞ではなく)。

農民も研究能力がある。実際、新品種の発見や品種改良、等々、新しい情報を生産してきた。数え上げれば枚挙にいとまがないくらいだ。試験研究機関よりも、情報生産能力が高くても不思議ではない。

2008年ノーベル化学賞は、「オワンクラゲの緑色蛍光タンパク」を発見した下村脩氏が受賞した。オワンクラゲは「なぜ光るのか」、家族総出で80万匹を捕まえて実験を繰り返し、タンパク質を光らせる手法を開発した。“数”がものを言った。とことん考えたことが解明に成功したと言えよう。

筆者の長年の農村調査の中でも、“研究熱心”という点で興味を引いたのは、新潟越後平野の平野農場である。夫婦でコメ60ha(自作30ha、作業受託30ha)の経営で、60kg当たり6000円の低コストを実現していた(拙著『新世代の農業挑戦』全国農業会議所2014年参照)。

作業受託を増やすことで、圃場の性状や栽培方法と収量や品質との関係分析のための情報を得ている。圃場の大小に関係なく、1枚1500円という低料金で引き受けている。田んぼの性状を見るためだ。作業受託を圃場の“情報集め”に使う発想が素晴らしい。これを毎年繰り返すことで、膨大な研究情報を蓄積している。

サンプル数の多さが注目される。例えば、新潟県の試験場の規模は水田16ha、茨城県の農業研究所は水田8ha、畑16haである。これに対し、平野農場は60haである。平野氏の研究は国や県の試験場よりも、サン

プル数が多く、また営農の実践でのサンプルであり、研究情報として競争力がある。

モチベーションは、ノーベル賞の下村博士と同じだ。にもかかわらず、今まで、農民がノーベル賞を受賞した例はない。“英語”で書いた論文がないからだ。

しかし、今後は変化していくのではないかと。「農業」という職業に対する社会的評価が変わっていく。農業経営は頭脳労働が決定的に重要な総合科学であり、農業は「先進国型産業」である。今や、彼らはベンチャービジネスさながらの働きをし、都市のサラリーマンより比較にならない位の高所得者も沢山輩出している。

これまでは優秀な人は非農業へ流れていたが、これからは農業分野にも向かっていく。実際、日本でも、医者や大学教授から農業経営者に転じる事例がポツポツ出ている。農民に対する社会的評価も変わり始めた。階級の変化といってもいい位だ。

農民がノーベル賞を取れるように、育成プログラムがあってよい。3段階方式を考えたい。第1段階(1代目):農家の規模拡大等⇒自立経営⇒都市家計並み生活。

第2段階(2代目):家業発展⇒社会的評価向上。ただし、いまだ「貧農史観」残る中での就農の故、最優秀息子が農業後継者になるとは限らない。

第3段階(3代目):サラリーマンより豊かな生活、社会的評価向上、「貧農史観」消える。農業後継者たちが米国留学、英語で論文を書ける素養を身につける。帰国後就農、農業経営で頭脳労働を繰り返し、30年後論文、その10~20年後、ノーベル賞受賞。

今年はFarmers' Nobel Project(ノーベル賞農民育成計画)スタートの年である。農家子弟が米国留学する。東京農大や農工大ではなく、カリフォルニア大学デービス校、コーネル大学、アイオワ大学等へ志望変更する。農家の海外研修ではなく、その子弟の海外大学留学である。

2021年は第2段階にある。3代目はまだ小中学生(10歳)、彼らが30年後、論文(早ければ)、40、50年後ノーベル賞受賞。

Farmers' Nobelの夢をタイムカプセルに入れて『農業経営者』に埋めておきたい。